

国冬・本少女卷朱雀院行幸の独自異文

浅 尾 広 良

序

一 国冬本源氏物語に関する研究史

別稿において、少女卷で行われた朱雀院行幸は、装束に特異な特徴をもち、往事の花宴を回想する文脈で、朱雀院

と、光源氏を連れた冷泉帝が揃うことに意味があることを論じた。⁽¹⁾ただし、それは国冬本を除いた大方の諸本での理

解である。鎌倉時代末期に書写されたという国冬本源氏物語は、この朱雀院行幸において多くの独自異文を持つ。しかもその多くが、装束や音楽など、行幸における中心的内容と関わっている。

本稿では、その違いを示して国冬本での朱雀院行幸の姿を明らかにするとともに、そこにどのような特徴があるのかを考えてみたい。

『源氏物語』諸本間の異同については、例えば阿部秋生は次のように述べている。

校異篇とその他数種の古写本とによって本文転化の状況を見ながらテキストを作った時の経験による主観的な感想の一つは、『源氏物語』の本文の異同は、数において決して少くはないが、各巻の話の次第や物語の話の組織に影響を与えて、変えてしまうほどの大きな異同や激しい異同は少いということである。(中略) 青表紙本・河内本・別本のいずれの本文で読んでも、『源氏物語』の話の筋道が変わってしまうことは殆どない、変るのは表現としての微妙な陰翳・強弱だと言つてよさそうに思う。(中略) 推測にすぎないが、『源氏

物語』の本文の異同のこのような性格だけから考えると、青表紙本・河内本・別本とわかれているが、原典は一つ系統のものであったのではないかと想像される。^②

と、諸本間における異同はあるものの、その差は小さいこと、さらに変わるのは話の筋道ではなく、表現としての微妙な陰翳・強弱だと指摘する。ところが、その一方で別本の異同に関しては、幻巻を例として、

別本諸本相互の異文は、青表紙諸本相互や河内本諸本相互の異文より数も多く、またその異文の中には、同一本文の一部が違っているというような書写に際しての単純な誤脱の類とは言いがたいものが時々ある。それらは、誰かの意識的な改訂かとさえ思われる異文である。何か意図するところがあったのかどうか、その辺のことについては、今のところ、何とも推測する手がかりもないように思う。^③

とも述べていて、時として別本では単純な誤脱とは言いがたい異文が存在するという。本稿で問題としようとする国冬本の少女巻もまた、この類に分類される内容であろう。国冬本源氏物語については、岡寫偉久子による書誌学的

研究があり、国冬本に関する基礎的な情報が整理されている。^④それを本稿に関わる範囲で紹介すると、以下のようになる。国冬本源氏物語は、鎌倉末期写十二巻十二冊と室町末期写四十二巻四十二冊からなる源氏物語五十四冊で、このうち鎌倉末期写十二冊が、極札等によって津守国冬筆と伝えられていることから国冬本と呼ばれてきた。ただし、室町末期写の四十二冊は寄合書であり、十四人の伝承筆者が極められているので、正確には伝津守国冬筆と寄合書の源氏物語である。このうち、今回問題とする少女巻は、鎌倉末期写の津守国冬筆による源氏物語である。この少女巻は、脱落と錯簡が激しく、これについて岡寫は以下のように指摘している。

三折からなる。第一折は墨付8丁であるが、その6オ4行「となくれいあやまつなどの給みな人か、え見」の、「などの給」と「みな人」との間に半丁程度の脱落がある。『大成』では「六七〇④」いてつれなく……六七〇⑫おこなりなといふに」に相当する。この脱落については、底本になかったのか、あるいは国冬本の写し落としか不明である。続いて、第一折と第二折との間、墨付丁数では8ウと9オとの間にも大きな

脱落がある。『大成』では、「六七四①しくなむありけるを……六九八②あまつ袖」に相当。これは少女巻の1丁分の字数から推測して25丁、紙数では12丁13紙分程の脱落となろうか。そして第三折には、(中略)帯木巻本文が3丁混入している。第三折のはじめ3丁。現在の少女巻の丁数でいえば第21丁23丁。従って少女巻としての本文は第二折末20ウから24オへと続く。図で示せば、左記のようになる。

第一折 (脱落) 第二折 第三折
(1—8) …… (9—20) (21 22 23 24—27)^⑤

帯木巻本文

このように国冬本少女巻は、前半中間部に大きな脱落がある上に、後半には一部帯木巻が入りこむという、本文としてはかなり混乱した状況を呈している。

書誌学以外の国冬本の特徴については、これまで伊藤鉄也と越野優子が精力的に研究を進めてきた。伊藤は、桐壺巻、帯木巻、若紫巻、鈴虫巻について考察を加え、桐壺巻では登場人物の心情を深く描写する姿を析出する。^⑥ 帯木巻

については青表紙本や河内本が成立する以前の本文の姿を伝えるとし、若紫巻については折毎の特徴を捉えて、それぞれ性質の違うものが一つに取り合わされたことを指摘する。^⑧ さらに鈴虫巻でも質の違う本文が取り合わされ、女三宮中心から他の人物へと視点が移動することを論じている。^⑨ このように、伊藤はかなりきめ細かく国冬本の特徴を整理し、登場人物の心情を深く描写する語り方や、同じ巻の中で質の違う本文が取り合わされている実態を解き明かしている。一方、越野は、桐壺巻、薄雲巻、少女巻、藤裏葉巻、鈴虫巻に考察を加えている。桐壺巻では巻末の高麗人の光君命名記事がないことに書写された時代性を見、薄雲巻では、本文の系統分類ではなく、本文の性質そのものを問う必要性を提起する。^⑩ また、少女巻では博士の滑稽な描写がないことや巻末の六条院が二条院となっていることを〈古代的〉〈源泉的〉といった言葉で意味付けている。^⑪ また、藤裏葉巻では人物論や巻論として総括できるものはないとしながらも、和歌表現において書写者が伝統的な表現にこだわり、源氏物語の新しさを理解できていない点や、漢籍の素養が疑われる箇所が見られるとする。^⑫ そして、鈴虫巻については、先の伊藤の論を承け、大島本のよ

うな一般的に流布している本文の表現より、国冬本は一層踏み込んだ詳しい心情・表現描写を有するとし、さらに中心と周辺に目配りをし、源氏を支える周辺の人々の側に立った視点をもつとするが、それは巻によって違うとも述べている。¹³⁾

これら国冬本に寄り添った独自の源氏物語の世界を読み解く伊藤や越野の研究に対して、やや視点を異にしてその特徴を分析するのが工藤重矩である。工藤は、少女巻の紫上の呼称と六条院の描写から、国冬本の特異な本文をもつて、ただちにその独自性を主張すべきではないとし、他本（例えば河内本や大島本等々）と共通であった本文が疵付きあるいは簡略化などの改変を受ける中で、結果的に生じてしまった独自の世界である可能性を指摘する。¹⁵⁾さらに、工藤は藤裏葉巻を取り上げ、官職・固有名詞等の異同、和歌の異文、誤写が想定される例、単純な誤写の例、紫上をめぐる異文について、国冬本が明らかに誤って書写したと思われる箇所を例示し、その疵について論じている。¹⁶⁾

以上のように、国冬本については、鎌倉末写という古さがその価値を支え、さらに青表紙本などに比べて詳しい心情描写を有することから、通行本以外の世界を有するとし

てその稀少性と独自性が評価されてきた。その一方で、錯簡・脱落など綴じによる本文の乱れがあるのに加え、錯乱した本文をそのまま写したと思われる箇所¹⁷⁾や、内容をよく理解しないで写していると思われる箇所があるなど、一部の本文については、明らかに疵を有するとも指摘されている。これらは改装と書写に根ざす問題であり、国冬本に至る伝承・書写過程の中にこそ問題の根本が存在する。しかし、それを考究することは今となつては不可能である。よって、本稿では国冬本に至つてどのような本文が変容したのかを指摘することしかできない。さらに、本稿で問題とする少女巻は、すでに工藤によつて疵を有すると指摘されてきた巻であることも付け加えておく。

二 大島本と国冬本との比較

次に具体的に朱雀院行幸の内容を見てみたい。比較対照として、通行本文とされる大島本の朱雀院行幸を含めた前後の場面を提示し、それとの比較から国冬本の独自異文を通覧してみる。やや引用が長くなるが、新日本古典文学大系本の本文を以下に記す。

〔40〕正月行事の盛んさ

ついたちにも、大殿は御ありきしなければ、のどやかにておはします。良房のおとゞ聞こえける、いにしへの例にならずらへて、白馬ひき、節会の日、内の儀式をうつして、むかしのためしよりもこと添へて、いかしき御ありさまなり。

〔41〕朱雀院への行幸

〔41―1〕きさらぎの廿日あまり、朱雀院に行幸あり。花盛りはまだしき程なれど、やよひは故宮の御忌月なり。とくひらけたる桜の色もいとおもしろければ、院にも御用意ことにつくろひみがかせ給ひ、行幸に仕うまつり給上達部、親王たちよりはじめ、心づかひし給へり。人々みな青色に桜襲を着給。みかどは赤色の御衣たてまつれり。召しありて、おほきおとゞまい給。おなじ赤色を着給へれば、いよ／＼ひとつものとか、やきて見えまがはせ給。人々の装束、用意常にことなり。

〔41―2〕院もいときよらにねびまさらせ給て、御さまの用意、なまめきたる方にすゝませ給へり。けふはわざとの文人も召さず、たゞその才かしこしと聞こえたる学生十人を召す。式部の省の心みの題をなずらへ

て、御題給ふ。大殿の太郎君の心み給べきなめり。臆だかき者どもは、ものもおぼえず、繋かぬ舟に乗りて池に離れ出でて、いとすべなげなり。日やう／＼くだりて、楽の船ども漕ぎまひて、調子ども奏する程の、山風の響きおもしろく吹きあはせたるに、火ざの君は、かう苦しき道ならでもまじらひ遊びぬべきものを、と世中うらめしうおぼえ給けり。

〔41―3〕春鶯囀舞ふほどに、むかしの花宴のほどおぼし出でて、院のみかども、「又さばかりの事見んや」との給はするにつけて、その世の事あはれにおぼしつゞけらる。舞ひはつるほどに、おとゞ、院に御土器まいり給。

うぐひすのさえづる声はむかしにてむつれし花のかげぞかはれる

院の上、

九重をかすみ隔つるすみかにも春とつげくる鶯の

声

帥の宮と聞こえし、いまは兵部卿にて、今の上に御土器まいり給。

いにしへを吹き伝へたる笛竹にさえづる鳥の音さ

へ変はらぬ

あざやかに奏しなし給へる、用意ことにめでたし。取らせ給て、

鶯のむかしを恋ひてさへづるは木伝ふ花の色やあせたる

との給はする御ありさま、こよなくゆへくしくおはします。これは御わたくしざまに、うちくのことなれば、あまたにも流れずやなりにけん、また書き落としてけるにやあらん。

〔41—4〕樂所とをくっておぼつかなければ、御前に御琴ども召す。兵部卿の宮琵琶、内のおとゝ和琴、箏の御琴院の御前にまいりて、琴は例のおほきおとゝに給はりたまふ。せめきこえ給。さるいみじき上手のすぐれたる御手づかひどもの尽くし給へる音は、たとへん方なし。唱歌の殿上人あまたさぶらふ。あなたうと遊びて、次に桜人。月朧にさし出でてをかしきほどに、中島のはたりに、こゝかしこ篝火どもとして、大御遊びはやみぬ。

〔42〕弘徽殿太后を見舞う

〔42—1〕夜ふけぬれど、かゝるつゝに、太后の宮

おはします方を避きてとぶらひきこえさせ給はざらんもなさけなければ、かへさに渡らせ給。おとどもろともにさぶらひ給。后待ちよろこび給て、御対面あり。いといたうさだ過ぎ給にける御けはひにも、故宮を思ひ出できこえ給て、かく長くおはしますたぐひもおはしけるものを、とくちおしう思はず。

〔42—2〕「いまはかくふりぬる齢に、よろづの事忘れ侍にけるを、いとかたじけなく渡りおはしまいたるになん、さらにむかしの御代のこと思ひ出でられ侍」とうち泣き給。「さるべき御陰どもにをくれ侍てのち、春のけぢめも思ひたまへ分かれぬを、けふなむ慰め侍ぬる。又くも」と聞こえ給。おとゝもさるべきさまに聞こえて、「ことさらにさぶらひてなん」と聞こえ給。のどやかならで帰らせ給ひゞきにも、后は、猶胸うちさはきて、いかにおぼし出づらむ、世をたもち給べき御宿世は消たれぬものにこそ、といにしへを悔ひおぼす。

〔43〕朧月夜らの日々

内侍のかんの君も、のどやかにおぼし出づるに、あはれなる事多かり。いまもさるべきおり、風のつてに

もほのめききこえ給こと絶えざるべし。后はおほやけに奏せさせ給ことある時ぞ、御たうばりのつかさ、かうぶり、何くれの事にふれつ、御心になはぬ時ぞ命長くつか、る世の末を見ること、と取り返さまほしう、よろづおぼしむつかりける。老ひもておはするまゝに、さがなさもまさりて、院も比べぐるしうたとへがたくぞ思ひきこえ給ける。

(少女卷二 三二七—三二二頁)

新日本古典文学大系では「40」から「43」の四つの場面に分けている。本稿ではそれをさらに段落毎に分けて、「40」正月行事の盛んさ、「41—1」朱雀院行幸の日程と装束、「41—2」賦詩と楽の様子、「41—3」春鶯囀の舞の起点とした過去の回想と唱和歌、「41—4」上の御遊び、「42—1」大后のもとを訪問し対面、「42—2」大后の思い、「43」臘月夜らの日々、とし、以下、それぞれについて大島本に対する国冬本の独自異文を見てみたい。比較しやすくするため、異なる箇所を傍線を附すこととする。

「40」「正月行事の盛んさ」の箇所では、一つ目に「良房のおとゞ」が「よしうちのおと、」とあり、二つ目に「むかしのためしよりもこと添へて、いつかしき御ありさまな

り」が「むかしのありさまなり」とある。「良房のおとゞ」は言うまでもなく藤原良房を指すが、「よしうちのおと、」となると誰を指すのかこのままでは不明である。大島本では光源氏が藤原良房の昔の例にさらに新しい例を付け加えて厳かな様子であるというのに対し、国冬本の場合だと、新しい例が付け加わることはなく、「よしうちのおと、」と同じ有様であるということになる。「いにしへの例」からすると、歴史上の固有名詞か、もしくは物語内の昔の例を承けるはずであるが、よく考えないまま写したもののか。

「41—1」「朱雀院行幸の日程と装束」の箇所では、大きな異文が数箇所ある。一つ目は「やよひは故宮の御忌月なり」が「やよひはこ宮の御き日なれは」とある。御忌月も御忌日も意味としてはそう変わらない。二つ目は「行幸に仕うまつり給上達部、親王たちよりはじめ、心づかひし給へり」の部分で国冬本にはない。三つ目は「人々みな青色に桜襲を着給。みかどは赤色の御衣たてまつれり」が「人々みなあをいろにさくらかさねをき給えり。みかどはあをいろの御そたてまつれり」とある。大島本では臣下が皆青色の袍を着て、帝が赤色の袍を着ているが、国冬本では臣下も帝も青色袍を着ている。四つ目は「召しあり

て、おほきおとまり給。おなじ赤色を着給へれば、いよ／＼ひとつものとか、やきて見えまがはせ給。人々の装束、用意常にことなり」が「ひとつものに、か、やくまてめてたくおはします」とある。大島本では光源氏が特別に召されて帝と同じ赤色袍を着て登場し、二人が「ひとつもの」のように輝くばかりに美しく見分けがつかないほどだというのに対して、国冬本では光源氏が召される文脈そのものがない。しかも、帝は青色袍を着て「ひとつものに、か、やく」とあり、臣下と一体となって帝が輝くように見えるの意か、「にかがやく」が「似輝く」なら誰か（何か）と似て輝くの意なのか、「めてたくおはします」は帝の様子であろうが、文意がとりにくい。さらに大島本の「人々の装束、用意常にことなり」が国冬本ではないことで、今回の行幸が特別な行事であることを強調する文脈もなくなる。

「41—2」「賦詩と楽の様子」の箇所では、一つ目に「けふはわざとの文人も召さず、たゞその才かしこしと聞こえたる学生十人を召す」が「けふはわかさと人もめてたくそのころかしこきなへたる十人めす」とある。大島本では専門の文人ではなく学生十人を召しているが、国冬本には

「文人」も「学生」の語もない。「若さと人柄のめでたく、その頃すぐれた人と言われた人々十人」というほどの意味か。二つ目に「式部の省の心みの題をなずらへて、御題給ふ」が「しきのかたのこゝろみの本をしへて給」とある。式部省の省試に準えて詩題を与えたとする文脈が、式部省の「こころみの本」を教えて与えるところがあるが、どのような意味なのかは不明である。三つ目は「臆だかき者どもは、ものもおぼえず、繋かぬ舟に乗りて池に離れ出でて、いとすべなげなり」が「ゆふくれになるをこたかきものとは、ものもおほえず」とある。「ゆふくれ」と時間表記が新たに加わり、「臆だかき者ども」が「をこたかきもの」とんは」とあるのも意味不明である。夕霧は、大島本で「火ざの君（冠者の君）」、国冬本で「太郎きみ」とあり、呼ばれ方は違うものの、行幸に呼ばれている点では同じである。四つ目は「日やう／＼くだりて、楽の船ども漕ぎまひて、調子ども奏する程の、山風の響きおもしろく吹きあはせたるに」が「やう／＼日くれてふねこきまして、しともそうするほど、かせおもしろく吹きあはせたり」とある。大島本では、日が傾いた頃に「楽の船ども」即ち唐楽の船と高麗楽の船が漕ぎめぐって調子合わせの曲を演奏すると、折

から吹き下ろす山風の響きが興趣深く相和するとあるが、国冬本では船に乗っているのは賦詩を命じられた人々だけで、楽の船に関する記述はない。よって、奏するのは漢詩で、山風が楽の音に響き合うのではなく、奏する漢詩に面白く風が吹き合わせたとある。

「41―3」「春鶯囀の舞を起点とした過去の回想と唱歌」の箇所では、一つ目に「春鶯囀舞ふほどに、むかしの花宴のほどおぼし出でて、院のみかども、「又さばかりの事見てんや」との給はするにつけて、その世の事あはれにおぼしつゞけらる」が「あそひ給ふほとにむかしの花のえんのことをほしいてられて、うゑ、「又さる事を見はや」との給につけて、そのよの事あはれにおほしいてらる」とある。直前の箇所では春鶯囀の舞がない。春鶯囀は往事の花宴を呼び起こす重要な契機と思われるが、国冬本では「あそひ給ふほと」と音楽からの連想としてのみ語っている。さらに、「院のみかど」が「うゑ」とある。このままだと帝のことにも見えるが、後の文脈に「院のうへ」の語があることから、ここは朱雀院と考えて良からう。続けて国冬本では「まいはつるほとに、おと、院に御かはらけ

まいり給」とあり、春鶯囀の舞がないのに「まい」が語られ、「おと、」が突然登場する。しかし、光源氏が特別に呼ばれた文脈もないので、この「おと、」が誰を指すのかは不明である。この後「41―4」の上の御遊びのところに出てくる大臣と考えたと「うちのおと、」か「ひたりのおと、」の可能性があるが、内大臣はもとの頭中将、左大臣は誰か不明である。濔標巻と同じと考えれば、元の右大臣の息子の左大臣の可能性がある。しかし、元の右大臣の息子の左大臣だとしても、これまでほとんど登場する文脈はなく、この後にもなく、いかにも唐突である。よって、朱雀院に土器を献上し、唱和歌の最初の詠者の「おと、」が国冬本では誰か判らないまま物語は進むのである。

さらに、唱和歌の箇所では、最初のおとどの和歌について大島本が「うぐひすのさへつるはるはむかしにて」が国冬本では「うぐひすのさへつるはるはむかしにて」とあり、朱雀院の歌では「九重をかすみ隔つるすみかにも春とつげくる鶯の声」が「こ、のへのかすみへたつるかきねにもはるとつけつるうぐひすの声」と、いくつかの異同がある。さらに三首目の兵部卿宮の歌「いにしへを吹き伝へたる笛竹にさへづる鳥の音さへ変はらぬ」が国冬本で「いにしへ

を吹つたへたるふへたけはさへつるとりのねさへかはらす」とあり、四首目の和歌が「鶯のむかしを恋ひてさえずるは木伝ふ花の色やあせたる」が国冬本では「うくひすのむかしをこふるさへつりは木つたう花のいろやあせたる」とそれぞれ若干の異同がある。しかし、ここでの大きな違いは、大島本では「おとゞ」（光源氏）が朱雀院に土器を献上して詠んだ歌に始まり、「院の上」（朱雀院）が詠み、兵部卿宮が「今の上」（冷泉帝）に土器を献上して歌を詠み、冷泉帝が歌を詠むというように、土器が渡りながら順次歌を唱和するのに対して、国冬本では兵部卿宮が土器を献上する相手が「今の上」ではなく「院のうへ」とあることから、大臣と朱雀院の贈答、次に兵部卿宮と朱雀院の贈答と、贈答歌が二度繰り返されることである。国冬本では二首目と四首目を朱雀院が詠んでおり、このような異文をもつのは国冬本だけである。さらに詠歌の後の草子地が「これは御わたくしさまに、うち／＼のことなれば、あまたにも流れずやなりにけん、また書き落としてけるにやあらん」とあるところが、国冬本では「これはたうしのうち／＼のことにて、すもなかれす」と大幅に簡略化しているうえに、やや意味も不明である。

「41—4」「上の御遊び」の箇所では、最初に「楽所とをくしておぼつかなければ、御前に御琴ども召す」が国冬本で「かくとをく、ことのねおぼつかなしとて御まへに御こと、もめして」とあり、殊更に「琴の音」がおぼつかないとして琴を召したとある。さらに、この箇所で大きく違うのは次に続く楽器の担当者である。大島本には「兵部卿の宮琵琶、内のおとゞ和琴、箏の御琴院の御前にまいりて、琴は例のおほきおとゞに給はりたまふ。せめきこえ給」とあって、兵部卿宮が琵琶、内大臣が和琴、箏の琴が朱雀院、琴の琴は太政大臣光源氏に無理に弾かせたとあるが、国冬本では「わこんは兵部卿宮、ひわ、うちのおと、しやうは院の御まへにまいらせたれば、きむをひたりのおと、にせめきこへ給」とあり、兵部卿宮が和琴、内大臣が琵琶と入れ替わり、箏の琴が朱雀院なのは同じだが、琴の琴は左大臣に弾かせたことになっている。「ひたりのおと、」とあるのは国冬本だけの異文である。次の「さるいみじき上手のすぐれたる御手づかひどもの尽くし給へる音は、たとへん方なし」は、「しやうすにすぐれたるもの、ねとんのくしたるは思ひやるへし」と簡略化し判りにくくなり、上の御遊びの最後の「唱歌の殿上人あまたさぶら

ふ。あなたうと遊びて、次に桜人。月朧にさし出でてをか
しきほどに、中島のはたりに、こ、かしこ篝火どもともし
て、大御遊びはやみぬ」の部分、国冬本では一切ない。

「42―1」「大后のもとを訪問し対面」の箇所では、大島
本にある「かゝるつゐでに」と「おはします方を避きてと
ぶらひきこえさせ給はざらんもなさけなければ、かへさ
に」が国冬本にはない。国冬本では、夜が更けたので弘徽
殿太后のところに行つたというのであり、「ついで」では
なく最初から予定されてたことと読める。さらに光源氏
が呼ばれていないため大島本の「おとどもろともにさぶら
ひ給」の部分がない。

「42―2」「大后の思い」の箇所では、光源氏が呼ばれて
いないため、太后を訪れた場面の後半の「おとゝもさるべ
きさまに聞こえて」の部分、国冬本にはない。ところが、
突然ここに「おとゝもことさらに候てなんとて」と「お
とゝ」が供奉していたと語られ、これが誰なのか国冬本で
は判らない。加えて、大島本の「世をたもち給べき御宿世
は消たれぬものにこそ、といにしへを悔ひおぼす」の部分
が国冬本では「かうよをたもつ月日をは、えけたぬわさな
りけりと、いにしへをうくおぼす」とあり、大臣が世をた

もつ「宿世」ではなく「月日」を消すことができないと、
「悔ひ思す」ではなく「憂く思す」とある。このあたり微
妙に大后の思いが大島本と国冬本では違う。

「43」「朧月夜らの日々」の箇所では小さな異同がいくつ
もある。大島本「いまもさるべきおり」が国冬本「いまも
さるへきおり」、「ほのめききこえ給こと絶えざるべ
し」が「ほのめき給へし」、「奏せさせ給ことある時ぞ」
が「そうし給事あるをり」、「御たうばりのつかさ、かうぶ
り、何くれの事にふれつ、」が「つかさかふりの御心にか
なはぬおりぞ」、「かゝる世の末を見ること、と取り返さま
ほしう、よろづおほしむつかりける」が「かゝるよのすへ
をみる事、おほしいて、とりかへさまほしうおほされけ
るを」、「老ひもておはするまゝに、さがなさもまさりて、
院も比べぐるしうたとへがたくぞ思ひきこえ給ける」が
「いりておはするまゝに、さかなくて、院もよろづくるし
くおほしける」と、細かい異同がいくつも続く。

大島本をはじめとした諸本間ではさほどの違いがないこ
とに比べると、国冬本の独自異文の多さは際立っている。
全体に簡略化され、また本文の一部がない場合も多く、そ
のために意味不明となったり、内容が大きく変わっている

傾向がある。これらは書写に際して起こった単純な誤脱というより、改変と言ってよいほどの変わりようである。

三 国冬本源氏物語少女卷の

朱雀院行幸の理解

「40」から「43」までを比較して判るように、大きく内容が違っているのは主に「41」の朱雀院行幸の場面で、それが「42」にも影響を及ぼしている。国冬本が大島本と大きく違う点を列挙すると以下の通りである。

一、行幸の際に太政大臣光源氏が特別に呼ばれることがない。

二、臣下も帝も皆青色の袍を着ている。大島本ほか諸本では光源氏と帝が赤色袍、臣下が青色袍を着る。

三、学生ではなく、その頃すぐれた人と言われた人々十人が召され賦詩を命ぜらる。

四、賦詩の間、楽の船が音楽を演奏し、それに山風が響き合うという内容がなく、船に乗った人が詩を奏する声に風が吹き合わさる。

五、花宴を思い出すきっかけとなる「春鶯囀」の舞が

ない。

六、朱雀院に土器を奉り歌を詠む「おとど」が誰か不明である。

七、和歌が唱和歌ではなく、二首ずつの贈答歌となっている。

八、四首目が朱雀院の詠んだ歌になっている。大島本ほか諸本では帝の歌。

九、上の御遊びでの担当する楽器が朱雀院を除いて皆違う。特に「琴の琴」の演奏者が「左大臣」とあり、この左大臣が誰なのか不明である。

十、上の御遊びに合わせて、唱歌する殿上人がいない。また、「安名尊」「桜人」といった催馬楽に関する記述がまったくない。

十一、光源氏を伴わずに冷泉帝が弘徽殿太后に会いに行く。大島本ほか諸本では帝が光源氏を伴って太后のもとに行く。

十二、誰を同行させたか語らないため、冷泉帝と一緒にいる大臣が誰だか判らない。

十三、誰だか不明の大臣が世をたもつ日々を消すことができないと太后がいにしえを「憂く」思う。

光源氏をこの行幸に登場させないことが、場面全体の理解に大きく影響を及ぼしていることが判る。別稿で指摘した通り、帝と光源氏が同じ赤色袍を着て、臣下が皆青色袍を着ることによって、帝と後見である光源氏の一体と、帝を中心とした臣下との調和が図られる。これは内宴や殿上賭弓、そして野行幸で行われた趣向で、それを朝覲行幸に用いたところにこの物語の作意がある²³。ところが、国冬本のように帝と臣下が皆青色袍を着るというのは、朝覲行幸においては勿論、その他の行事でも管見の限り前例がない。国冬本は皆青色袍を着ることによって一体感を演出しようとしたのかとも思われるが、歴史との関わりが捨象され、その意味は浅薄化した感がある。しかも、帝と光源氏と同じ赤色袍を着ることで、特別な存在として描かれるという要素もなくなる。この行幸において特に重要な意味をもって語られた装束は、国冬本では大きく意味を失ってしまうのである。

さらに、光源氏を登場させないことは、さまざまな破綻をもたらししている。一つ目は唱和歌の最初の詠者が誰なのか不明となることである。往事の花宴を回想する文脈であるから、記憶を共有する人であることは確かである。加え

て、儀式の場でありながら、国冬本は唱和歌でなく、二首の贈答を二度繰り返す形にしているのも、如何なる意図があるのか判然としない。二つ目に、上の御遊びでの楽器の担当者に混乱を及ぼしている。兵部卿宮と内大臣の担当楽器が入れ替わり、さらに「琴の琴」を「左大臣」に弾かせている。他の巻との関連では、兵部卿宮は楽器全般に通じているように語られ²²、内大臣は和琴の名手と語られている²³。その繋がりで見ると、この場面だけで内大臣が琵琶を弾く国冬本の記述は不自然と言わざるを得ない。そして「琴の琴」については、すでに指摘があるように、『源氏物語』内での弾き手は皇統出身者に限られている²⁴。この「左大臣」が誰かが問題で、濡標巻の左大臣であれば、皇族出身者ではないし、これまで音楽に関する記述も全くなく、ここでいきなり「琴の琴」を弾くというのは極めて不自然である。三つ目は、国冬本では弘徽殿太后のもとを帝だけが訪れるのに、後半で突然「おと、」の存在が語られ、さらにその「おと、」が「世をたもつ月日」を消すことができないと太后が「いにしへをうく」思うと語るのである。ここは、朱雀帝御代に東宮（今の冷泉帝）の廢太子を企図し、後見である光源氏も併せて葬り去ろうとしてできなか

ったその悔しさを、今となっても大后が感じている文脈であるから、帝と光源氏を見てこそ意味があるはずである。とすると、帝と一緒に大后を訪れた「おと」とは国冬本でも光源氏なのか。だとすると、行幸の最初で光源氏を呼んだとする記述こそないが、国冬本でも実は光源氏を行幸に供奉させている可能性がある。そうすると、朱雀院に土器を献上し和歌を詠んだ「おと、」は光源氏であったことになる。さらに先の「琴の琴」を弾く「左大臣」こそが光源氏である可能性が出てくるが、国冬本少女巻は前半に大きな脱落があり、大島本他諸本で秋好の立後の後に光源氏が太政大臣に就任した箇所が脱落してないため、内大臣から次に昇進した官位を確かめることができない。元の頭中将がこの場面で既に内大臣として登場しているから、左右大臣か太政大臣であることは確実である。歴史的に内大臣が昇進して次に就任した官位を通覧すると、一条朝以前までは、右大臣が一例、左大臣が一例、太政大臣が一例、摂政が一例あるのみである。内大臣から右大臣になったのは一条天皇御代の藤原道兼で正暦五（九九四）年に内大臣から右大臣となっている。これは右大臣だった源重信が同年に左大臣となって右大臣が空いたためである。内大臣か

ら左大臣になったのは桓武天皇御代の藤原魚名で、天応元（七八一）年に左大臣となる。これも宝龜二（七七二）年から左大臣が空席になっていたためである。内大臣から太政大臣になったのは円融天皇御代の藤原兼通で、天延二（九七四）年に太政大臣になっている。この時には左大臣が源兼明、右大臣が藤原頼忠で、いずれも空きがなく、太政大臣のみ空席だったためであろう。内大臣から摂政になったのは一条天皇御代の藤原道隆で、正暦二（九九一）年に父兼家の後を承けてなっている。これらから見ても、光源氏は左大臣と太政大臣のいずれになったとしてもおかしくはない。ただし、濡標巻での左大臣が辞した、もしくは薨去したとする記述か、空席だとする記述がないと、そのままで左大臣になったとは考えにくい。

国冬本のこの場面でのもう一つの特徴は、音楽関連の記事が他本に比べて大幅に少ないことである。花宴を回想するうえでとても重要な契機となる「楽の船ども」と「春鶯囀」の舞がないのははじめ、上の御遊びでの催馬楽を唱歌した殿上人の存在も語られないし、「安名尊」^{あななみみこと}や「桜人」などの曲名もない。催馬楽「安名尊」はこの朱雀院行幸の「今日の尊さ」を言祝ぐとても重要な曲と考えられるが、

国冬本はそうした要素をすべて捨象している。なぜこうなっているのかは不明とせざるを得ないが、国冬本は藤裏葉巻の六条院行幸の場面でも「賀皇恩」「書司」「宇陀の法師」など音楽関連の内容で知識不足が影響して誤写したと思われる箇所が指摘されている。少女巻の場合は記述そのものがなく、藤裏葉巻の場合は間違つて記述しているという点での違いはあるが、音楽関連の記事に集中して現象する点では何らかの繋がりがあるのかもしれない。ただし、国冬本全体にわたつて音楽関連の本文に問題を抱えているわけではない。例えば総合巻の終わり近くでの上の御遊びや、若菜上巻で繰り返される光源氏の四十賀での音楽関連の内容は、他本とほとんど違いがない。国冬本の一部の巻の音楽関連の記事に、こうした痕跡が見られるのである。総合巻は津守国冬の筆跡を臨模したと思われる室町末の日比正廣の筆で、少女巻と若菜上巻は鎌倉末の津守国冬筆と伝えられている⁽²⁶⁾。よつて書写された時期の問題ではなさそうである。鎌倉末の国冬筆の本でも、一つの系統ではなく青表紙本や河内本、また混合本を写した可能性が指摘されているし、同じ人が書写してこれほどの差が出るとは考えにくいから、少女巻の本文の変容については国冬が書写す

る以前にすでに起こっていたと考える方が妥当であろう。国冬本の朱雀院行幸では、太政大臣光源氏を登場させずに、冷泉帝をあくまで話の中心に据え、冷泉帝と臣下達、冷泉帝と朱雀院、冷泉帝と弘徽殿太后との関係として語ろうとした形跡が窺われるのである。しかし、これによりかえつて文脈に破綻をきたしてしまつていようにも見える。

おわりに

国冬本源氏物語の少女巻の朱雀院行幸の場面は、他の諸本と比較して著しく独自異文が多い。しかも、中心人物の一人である光源氏を登場させないために、装束や和歌の唱和の意味、上の御遊びの様子、弘徽殿太后を訪れる場面などで、大幅に意味が変わつてゐる。これほどの異文が如何なる理由によつて出来たのかは、未詳とせざるを得ないが、装束や音楽関連記事がもつ意味をあまり深く考えなかつたために起こつた可能性が十分に考えられる。しかも鎌倉末の津守国冬が書写する以前の段階で起こつていた可能性が高い。加えて、巻によつて異文の量が大きく違ふことからすると、一系統の揃い本ではなく、いくつかの素姓の

違う本から国冬本がまとめられた可能性が考えられるのではない。

最後に一言付言しておくが、本稿は国冬本の価値を貶めるために書いたのではない。『源氏物語』を研究するにあたり、本文の異文状況を確かめるのは当然の手続きであり、いつもであればなるべく諸本で同じところ——本文系統が違っても読みがぶれないところ——を根拠として論を展開するのだが、この朱雀院行幸においてはそれが不可能なほど国冬本は異文に満ちていた。そのため、国冬本だけを別に取り上げて、本文の様相を詳しく見た次第である。

注

- (1) 拙稿「少女巻の朱雀院行幸」(『知の挑発 源氏物語の方法を考える——史実の回路』所収 武蔵野書院 平成27(二〇一五)年予定)
- (2) 阿部秋生「別本の本文」(『源氏物語の本文』所収 岩波書店 昭和61(一九八六)年) 一二七―一二八頁
- (3) 阿部秋生 注(2)に同じ 一七七頁
- (4) 岡嶋偉久子「国冬本源氏物語」(『源氏物語写本の書誌学的研究』所収 おうふう 平成22(二〇一〇)年)
- (5) 岡嶋偉久子 注(4)に同じ 一八二―一八三頁
- (6) 伊藤鉄也「桐壺」における別本群の位相——桐壺帝の

描写を中心にして——」(『源氏物語本文の研究』所収 おうふう 平成14(二〇〇二)年)

- (7) 伊藤鉄也「帚木巻における一異文の再検討——別本国冬本の表現相の定位をめざして——」(『源氏物語受容論序説』所収 桜楓社 平成2(一九九〇)年)

- (8) 伊藤鉄也「国冬本「若紫」における独自異文の考察——いわゆる青表紙本に内在する異本・異文について——」(『源氏物語本文の研究』所収 おうふう 平成14(二〇〇二)年)

- (9) 伊藤鉄也「源氏物語別本群の長文異同——国冬本「鈴虫」の場合——」(『源氏物語本文の研究』所収 おうふう 平成14(二〇〇二)年)

- (10) 越野優子「国冬本源氏物語の「光る君」——特異な桐壺巻巻末の物語るもの」(『物語研究』第8号 平成20(二〇〇八)年3月)

- (11) 越野優子「多様な源氏物語世界への模索——伝国冬筆薄雲巻一冊(天理大学附属天理図書館蔵)を素材として——」(『古代中世文学論考』第20号 平成19(二〇〇七)年10月)

- (12) 越野優子「源氏物語の別本の物語世界——伝国冬本少女巻を中心に」(『文学・語学』第一八二号 平成17(二〇〇五)年7月)

- (13) 越野優子「伝国冬本源氏物語の世界——藤裏葉巻をめぐる——」(『詞林』第35号 平成16(二〇〇四)年4月)

- (14) 越野優子「国冬本における女三宮について——鈴虫の巻を中心に——」(『国語国文』第71巻第2号 通巻八一〇号 平成14(二〇〇二)年2月)
- (15) 工藤重矩「国冬本源氏物語乙女巻に見られる本文の疵——紫上の呼称と六条院の描写をめぐって——」(『国語国文』第81巻第12号 通巻九四〇号 平成24(二〇一二)年12月)
- (16) 工藤重矩「国冬本源氏物語藤裏葉巻の本文の疵と物語世界——別本の物語世界を論ずる前提として——」(『中古文学』第92号 平成25(二〇一三)年11月)
- (17) 岡寫偉久子は注(4)で、橋姫巻を取り上げ、「全く本文を読まず、ただ文字を写すだけ、このような書写者の姿が浮かび上がってくる」と指摘する。二〇三頁
- (18) 工藤重矩「国冬本源氏物語藤裏葉巻の本文の疵と物語世界——別本の物語世界を論ずる前提として——」注(16)に同じ
- (19) 大島本との比較を行うため、本稿での『源氏物語』本文の引用は、岩波書店刊新日本文学大系『源氏物語』に拠り、巻名・巻数・頁数を記した。なお、場面を整理するため、新大系脚注の場面番号と小見出しを使用した。
- (20) 国冬本源氏物語の本文は、伊藤鉄也・岡寫偉久子による翻刻(伊井春樹編『本文研究 考証・情報・資料 第六集』所収 和泉書院 平成16(二〇〇四)年)により、適宜句読点・鉤括弧を付した。

- (21) 拙稿「少女巻の朱雀院行幸」注(1)に同じ
- (22) 兵部卿宮は、総合巻の天皇御前での総合の後の上の御遊びで箏の琴を弾き、若菜上巻の玉鬘主催の光源氏四十賀の際の上の御遊びでは琴の琴を担当している。
- (23) 内大臣(元の頭中将)は、総合巻でも若菜上巻でも、上の御遊びの際にも和琴を弾く。
- (24) 植田恭代「琴の琴」(『源氏物語事典』大和書房 平成14(二〇〇二)年)
- (25) 工藤重矩「国冬本源氏物語藤裏葉巻の本文の疵と物語世界——別本の物語世界を論ずる前提として——」注(16)に同じ
- (26) 岡寫偉久子「国冬本源氏物語」注(4)に同じ 一七七～一七八頁
- (27) 岡寫偉久子「国冬本源氏物語」注(4)に同じ 一九六頁

(本学日本語日本文学科教授)